慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	あるオレゴン移住者の記録 : アメリカ極西部への西漸運動
Sub Title	A record of an overland emigrant
Author	岡田, 泰男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1992
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.85, No.2 (1992. 7) ,p.176(56)- 196(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19920701-0056
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920701-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」85巻2号（1992年7月）

あるオレゴン移住者の記録*

——アメリカ極西部への西漸運動——

岡　田　泰　男

はじめに

南北戦争がサムター要塞への砲撃で始まってから2か月ほどたった1861年6月16日，あるオレゴンの農民は，20年間にわたって書き続けてきた日記に，次のように記している。「晴，午後ときどき曇，涼しく気持よい。教会へ行く。レイナー師が熱のこもった良い説教をした。朝の祈りで，彼は狂乱したわが国が，ふたたび一つにまとまり，幸せになるよう祈った。おお！　そのようなことが可能だろうか。この，かつては幸福であった国が二つに引き裂かれ，兄が弟と，親が子と，互いに血で血を洗う争いを起すとは！　おお，天なる父よ，われらを，そのような恐ろしい目にあわされませんことを！」(1)

この農民，サミュエル・デクスター・フランシス（Samuel Dexter Francis）は，アメリカ北東部のヴァモント州から中西部のイリノイ州へ，さらに極西部のオレゴン州へと大陸を横断して移住を重ねてきた。フランシスの支持する民主党は，いわゆる「膨脹の天命」を宗とし，合衆国の領土拡大に努めてきたが，フランシスもまた，西部への進展に自ら身を投じた一人であった。領土の拡大は，しかしながら奴隷制拡大と結びつき，他方で奴隷制への反対も高まることとなる。フランシスは北部の小農民であったから，奴隷制反対の講演を聞きにいったこともあるが，基本的には民主党対ホイッグ党という図式の中で政治をとらえていた。イリノイに住んでいた頃，メキシコ戦争に関して，こんな風に書いている。「国会では戦争問題が激しく論じられている。ホイッグ党は，いつもながら領土拡大に反対だ。彼等に都合の良い議論を使って戦争に反対し，人びとをだまし，欺こうとしている。しかし，私は共和主義が最後には勝利し，わが国の名誉が打ち立てられることを望

(*) 本稿は「ジャクソン期アメリカ　ある東部農民の生活と思索」『三田学会雑誌』83巻4号（1991）126-148頁の続編であるが，主題が異なるので，題名を変えた。

注（1） 史料は下記のものである。Samuel Dexter Francis Diary, 1841-1862 (MSS) Yale University, Beinecke Rare Book and Manuscript Library. この日記の文章を引用する場合，本文中に年月日を記した場合及び，引用文の後に年月日を記した場合は，いちいち注をつけない。(61. 6. 16) とあれば1861年6月16日の意味である。特に注記する際は，Francis Diary とし，年月日は上記の如く略記する。

み，かつ信じている。」(48.4.2)

民主党のポーク大統領が望み，またフランシスも望んだように，メキシコ戦争の結果，合衆国は広大な領土を獲得した。しかし，新たな領土に奴隷制を拡張させまいとする「ウィルモット修正」をめぐる動きの中で，民主党対ホイッグ党の対立よりは，南部対北部という対立が明白になっていった。そして南部の影響力の強くなった民主党は，かつてのそれとは変質しつつあった。かかる政治情勢の変化は，カリフォルニアにおける金発見と，太平洋岸地域の人口増大によって，一層決定的なものとなった。メキシコ戦争を支持し，自らオレゴンへ移住したフランシスは，それとは知らずに，「兄が弟と，親が子と血で血を洗う争い」を準備していたともいえよう。(2)

フランシスが日記をつけ始めた1841年から南北戦争までの時期は，西部フロンティアが太平洋岸まで拡大すると同時に，東部においては工業化，都市化が一層進んだ時代であった。また，西部といっても，旧北西部すなわちオハイオ，インディアナ，イリノイなどの地域は，開拓が始まってから，すでに一世代が経過し，もはやフロンティアとは云えなかった。ミシシッピ川以東での機会が制限されつつある時期に，メキシコ戦争やカリフォルニアの黄金は，新たな夢や機会を提供することで，多くの人びとを引きつけたのである。本稿では，イリノイ，さらにオレゴンへ移住した時期のフランシスに焦点をあてつつ，西漸運動の意味を考えてみたい。(3)

1

フランシスが故郷のヴァモント州バーナードを発ったのは，1845年9月9日のことであった。日記には「はるか西部へ出発」とあるのみで，目的地は記されていないが，その後の旅程から見て，多分シカゴまで行く予定は立てていたものと思われる。何故，西部への移住を決意したのか。同年の春，父親が農場を売却し，自分は他人に雇われて働くようになる。その後，妻子をとりあえず細君の実家に住まわせるが，「ここでの用件を片付け，どこか別の地方で家を手に入れるまで」(45.6.4)とあるので，この時点で西部への移住の決意は固まっていたものと思われる。夏の間は，バーナードで農業労働者として働き，秋になって出発する2週間前に，こんなことを書いている。

「人間にとって，精神的もしくは肉体的に仕事についていることが大切だ。何の仕事もない者，あるいは怠けて働く気のない者，勉強が嫌いな者は，一般的に節操のない人間だ。頭脳か手が有益に使われていないと人は堕落する。最初，生来の悪人は別として，まあ無害な娯楽，ボール遊び，輪投げ，チェッカーやカード遊びをするか，狩猟や魚釣りのような，より荒っぽい遊びをする。そ

注（2） この時期に関する書物はあまりに多いが，最近の概説書で読みやすいものとして一冊あげておく。James M. McPherson, *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era* (New York, 1988).

（3） 旧北西部のフロンティアについては，次を見よ。Malcolm J. Rohrbough, *The Trans-Appalachian Frontier: People, Societies, and Institutions, 1775-1850* (New York, 1978). なお，東部から中西部への移住については，別の機会に述べた。岡田泰男「ニュー・ヨークからアイオワへ—ある農民の西部移住」(上・下)『三田学会雑誌』67巻7号 (1974) 1-21頁，8号 (1974) 21-37頁。

れから賭けに一寸手を出し，悪い仲間に入り，闘鶏，競馬と，次第に深みにはまり，ついには賭博場，酒場，娼家に入りびたりになる，というのが，安定した仕事のない人間の陥りやすい道だ。」(45.8.23)

この文章は，いささか牧師の説教の引き写しのようなところがあるが，当時のフランシスの境遇を考えると，全く観念的なものとは云えない。農業労働者の仕事は，季節的な雇用であるし，バーナードのような東部の寒村では，それ以外に安定した仕事を見出すのも困難である。故郷に留まっている限り，堕落への道をたどらざるを得ぬという閉塞的状況が，やる気のある人間の目を，都会や西部へ向けたのであろう。フランシスは農場育ちで，かつ都会志向ではなかったから，西部移住は無理のない選択であった。

ところで，東部から旧北西部への旅は，もはや困難ではなく，冒険的なところはない。ヴァモント州内は駅馬車で，ニューヨーク州東端のホワイトホールまで行くが，家を午後に出て途中一泊し，翌日には着いている。そこからエリー運河へ出て，ニューヨーク州西端のバッファローまで運河船で行く。当時の旅行案内を見ると，この運河船は週何回も出ていた。フランシスは，ニューヨーク州内に，すでに移住した親族がいるので，そこに立寄ったりしているが，エリー運河の旅は正味8日間程度だった。バッファローからシカゴまでは，エリー，ヒューロン，ミシガン湖と五大湖を経て，プロペラ船の旅である。蒸気船の方が早いが「プロペラ船は非常に安全な船といわれている」(45.9.22) とある。途中，湖水が荒れたり，故障したりしたため，9日と10時間半の船旅となったが，通常は1週間かからない。したがって，シカゴまでは少々遠方への旅といった趣きで，後のオレゴンへの移住とは大違いである。なお，この際には妻子は同行しておらず，翌年，迎えに戻っている。移住先で落着く場所を決めてから，家族を迎えに来る積りであったらしい。(4)

この旅行の費用についてフランシスは記していないが，翌1846年に出版された旅行案内によれば，ホワイトホール・オルバニー間は77マイルで，4ドル62セント，オルバニー・バッファロー間は325マイルで8ドル，そして，バッファロー・シカゴ間は，1,047マイルで，蒸気船12ドル，プロペラ船11ドルとなっている。駅馬車の部分の運賃は不明であるが，全行程，ほぼ1,500マイルの旅が25ドル程度の費用で可能であった。フランシスが夏の間，農場で働いたときの賃金は，通常1カ月10ドル，草刈りの月は18ドルであった。したがって，ひと夏働けば，単身で西部へ行く費用は稼げたことになる。(5)

さて，旅の容易さはともあれ，故郷から1,500マイル離れた西部は，フランシスの夢と希望をかなえてくれたであろうか。以下，東部から移住した農民にとっての，西部農村の現実について記そう。10月2日にシカゴに到着したフランシスは，翌日，早速周辺の農村を見に行く。当時のシカゴは，まだ鉄道も来ておらず，後年の大都市とは異なり，歩いて町を出ると田園が拡っているという

注（4） *The Picturesque Tourist; Being a Guide through the Northern and Eastern States and Canada* (New York, 1844), pp. 106-8, 178-83, 208.

（5） *The American Guide Book; Being a Hand-Book for Tourists and Travellers* (Philadelphia, 1846), pp. 82, 95, 105, 128-9. なお，前記1844年の案内書にも同様な運賃が示されている。

情景であった。「非常に美しい。土地は豊かで，平坦か，ゆるやかに起伏している。家畜も立派で，この季節にしては元気が良い。畑に行くと，とうもろこしを刈っている男がいた。5月末にすき起して，うねの間にとうもろこしをまき，その後何の手入れもしていないが，エーカーあたり40ブッシェルの収穫があるだろうと云った。……物価はヴァモントと同じくらい。農産物は安く，小麦60セント，とうもろこし25セント，オート麦25セント，じゃがいも25セントくらいだ。しかし，一人の人間が，ずっと広い土地を耕せるので，大変利益が上がる」(45.10.3) というのが第一印象であった。

西部は人手不足であったので働き口はすぐに見つかる。道で会ったフットという人に雇われ，シカゴから30マイルほど離れたジュニーブの農場で10月7日から働き始める。「ここで働くのは楽しみだ。土地は平らで，石ころもなく……ニューイングランドの人間には喜びだ」(45.10.17) と最初の日に書いているが，たしかに石ころだらけのニューイングランドの畑に比べ，耕作は容易であった。こうした点を，より詳しく記述しているのが，翌年の春，初めて土地をすき起こした日の日記で，その文章は，読書好きであったフランシスらしく，農作業の記録とは思えぬところすらある。

「スチールのすきで畑をおこした。(6) それを使うのは本当に楽しい。スチールのすきは，よく磨かれ，ツルツルしている。そうでないと土がすきへらに付いてしまうからだ。ここでは鋳鉄のすきなど役に立たない。土地は良く，土壌は軽くて深い。すきを邪魔する石ころも切株もない。軽い土壌を50ロッド〔長さの単位〕，100ロッドとすき起してゆくのは，東部で石や切株の間をすくのと違い愉快である。草原は緑のじゅうたんをしきつめ，木々の葉は夏の衣裳を身につけた。桃やすももの花が満開で，いたるところ自然は微笑み，陽気にしている。」(46.4.25)

この様に恵まれた土地へ移った彼にとって，当面の不満は妻子と離れていることだった。イリノイへ着いて，しばらくした頃，郵便局へ行ってみたが，家からの手紙はなかった。「家を立って2カ月以上になるが，一言の便りもない。男子が保つべき威信を保つためには，私の有する全哲学を必要とする。しかし私が健康であれば，……じきに再会できると信ずる」(45.11.13) などと書いている。この望みは，次の年には叶えられる。フランシスは4月30日にシカゴからバッファローへの蒸気船に乗り，5月14日の早朝，ホワイトホールに着く。午前中の駅馬車の便がなかったので，山道を40マイル徒歩で歩き，途中，民家に泊めてもらい，翌朝10時にバーナードの細君の許にたどりついた。

それから10日ほどして，妻子を連れてイリノイ州へ戻る際，彼はもう一度ニューヨーク州を通る。エリー運河沿いは土地が肥沃で小麦の良く出来る地域だったが，この1846年は，病虫害のため，小麦は不作であった。とうもろこしは，出来が良さそうであったが，フランシスはこう記す。「でも

注（6） イリノイにおけるスチールのすきの利用については，下記を参照のこと。東部で使われていた鋳鉄のすきが，草原の土壌に合わなかったことを，フランシスの日記は例証している。Clarence H. Danhof, *Change in Agriculture: The Northern United States, 1820–1870* (Cambridge, Mass., 1969), pp. 194–99.

私には美しい西部が与えられんことを。半分の労働で，ここより多くの収穫があるだろう。」(46.7.31) この言葉は嘘ではなく，現に，明くる1847年，とうもろこしの植付の際に「ニューイングランドの人間は，ここで，われわれが，とうもろこしを植えるのを見たら，その早さに驚くだろう。今日は4エーカー植えたが，半日と少し働いただけだ」(47.5.22) と書いている。急斜面のやせ地で，石や切株の多いヴァモントの山村から移住したフランシスにとって，農作業の容易さ，能率の良さという点で，イリノイは約束の地といえた。

ヴァモント時代，穀作はほとんど自給用であって，小麦，オート麦を2～3エーカーずつ作付け，20～40ブッシェルの収穫を得ていたにすぎなかった。イリノイへ移ってからの記録を見ると，1847年には，春小麦を18エーカーまき，収穫量は不明であるが，シカゴで計110ブッシェルを売却している。48年には小麦23～24エーカーをまき，収穫量は444ブッシェル，またオート麦は5～6エーカーで226ブッシェルの収穫があり，さらに，とうもろこし56エーカーを作付けている。翌49年，小麦は不作で150ブッシェルの収穫しかないが，オート麦は265ブッシェル，1850年の小麦収穫量は355ブッシェルとなっている。結局，ヴァモント時代に比べて，作付面積も収穫量も10倍以上になったと云ってよいであろう。とうもろこしの中耕や小麦収穫のため，臨時に他人を雇うことはあったが，通常はフランシスのみが働き手である。まさに，彼が最初シカゴに到着したとき書いたように，「一人の人間が，ずっと広い土地を耕せる」のであって，経営拡大という観点からすると，移住は成功だった。(7)

もっとも，肝心の家や土地はどうか。ヴァモントから家族を連れて戻った際，とりあえず以前の雇い主のフットのところへ戻り，数日後に，かつて学校として使用されていた建物へ移る。「縦横12フィートと16フィートの大きさで，長椅子など取り払ってしまうと，まずまずの部屋となった。壁もしっくいで塗られているので，小さくはあるが，他のイリノイの人の家より上等だ」(46.8.30) と満足している。フランシスのいたのは，イリノイ州ケイン郡であるが，同郡の郷土史の中の開拓民の思い出によれば，丸太小屋は通常，14フィートと16フィートくらいの大きさであったという。(8) この校舎は一時借りていただけの模様で，翌年5月5日に「小さな校舎を出て，より便利な家に引越。ベイカー氏の土地に移ったが，家はそれについている」という記入がある。多分，この記述は，フランシスが農場を借り入れ，小作農になったことを意味している。

フランシスは最初，フットの農場で労働者として働き，家族が移住してからは小作農となった。「ベイカー氏の土地」に移ったのは1847年であるが，翌48年1月13日「とうもろこしの皮むきを終る。自分の取り分は半分で，205ブッシェル」とある。同年の秋には，「オート麦を脱穀する。226ブッシェルで，半分の113ブッシェルが自分のもの」(47.9.1)「小麦の収穫は444ブッシェル，半分が自分のもの」(47.9.20) とあるので，ヴァモント時代と同様，分益小作農で取り分は2分の1で

注（7） Francis Diary, 47.4.18; 47.10.4; 47.10.25; 48.4.8; 48.5.18; 48.9.1; 48.9.20; 49.9.4; 49.9.12; 50.9.28.

（8） Newton Bateman and Paul Selby, eds., *Historical Encyclopedia of Illinois and History of Kane County* (Chicago, 1904), p. 649.

あったことが分かる。十分な資金のない移住者にとって小作農になるのは，手っ取り早い道であり，また，当時の中西部に，かなり小作制が普及していたことは良く知られている。(9)

もちろん，農民の希望は自分の土地を持ち，自作農として独立することであったに相違ない。その頃の西部には連邦政府の所有する公有地があり，エーカーあたり1ドル25セントで購入できることになっていたから，当然誰もが，その取得を考える。フランシスも1848年6月15日「ブリッグスという人から，南に60マイルほどいったグランディー郡に，政府の土地があると聞く。肥沃で非常に良い土地だという。すぐにそこに行ってみることにした」と記す。翌朝，ポターという男と一緒に出発し，2日目の夕方に現地に着く。「このあたりは思っていた通り，とても良い。土壌は肥沃な黒色のロームと砂土が混っている。……土地は平坦で，草原はゆるやかにうねっている。今まで見た中で最も良いところだ。ここにクォーター・セクション〔160エーカー〕を取得することに決めた」(48.6.18) とある。なお，ここに出てくるブリッグスやポターという人物は不動産屋であったろう。政府の土地といっても，それに関する情報や取得手続きは，不動産屋に頼むのが普通だったからである。(10)

公有地取得の決断は，しかし，いささか急にすぎたのかもしれない。その年の12月3日，「南へ行くことはやめた。ここでフットの土地，60もしくは65エーカーを買うことの交渉がほぼまとまった」と記している。農産物の市場はシカゴのみであったから，グランディー郡は少し遠すぎると考えなおしたのであろうか。ともあれ，フットの土地を購入する話はまとまり，1849年5月には晴れて自分の土地を開墾している。そして7月には「われわれ自身の家へ移った。2週間ほど工事にかかり，囲いをし，板を張り，床を敷き，屋根をふき，窓を三つ付けた。まだ風通しが良すぎるが，気分が良い」(49.7.15) とあるように，自分の家も建てた。西部へ移住して5年目に，土地と家を持てたわけであって，イリノイの畑が耕しやすいとはいえ，厳しい労働に耐えた成果であった。

ここでフランシスが満足してしまえば話は終るのだが，実はそうではない。1851年3月20日に，突然「私の農場をエーカーあたり11ドルで売る。ベイカー氏へ支払った後，240ドル手元に残る」という記入があり，翌52年4月20日，「妻と5人の子供，ホイップル夫婦と子供1人，男5人と一緒に雨の中をオレゴンに出発」と記されている。1850年秋から52年にかけては，日記の記入が著しく少なく，50年9月28日以降空白で，急に上記の農場売却の話が記され，後は51年は3回のみ，52年はオレゴン出発まで全く記入がない。したがって，この空白の期間に何らかのカタストロフィが生じて，オレゴンへ移住せざるを得なくなった，との想像も可能であろう。しかし，前後の調子からして，それほどの破局が訪れたとは考え難い。

注（9） 中西部の小作制に関する研究については，次を見よ。Donald L. Winters, "The Economics of Midwestern Agriculture, 1865-1900," in Lou Ferleger, ed., *Agriculture and National Development: Views on the Nineteenth Century* (Ames, Iowa, 1990), pp. 78-9. なお，イリノイにおける小作制については，かつて記したことがある。岡田泰男「アメリカ中西部における小作制—19世紀後半・イリノイ州の例」『三田学会雑誌』56巻1号（1963）23-43頁。

(10) 公有地に関しては次を見よ。Paul W. Gates, *Landlords and Tenants on the Prairie Frontier: Studies in American Land Policy* (Ithaca, 1973).

土地を買った1849年，小麦は不作であったが，一応150ブッシェルの収穫があり，その半分を粉にしてシカゴで売却した。そして材木を1,300フィート購入し，大工を雇って家に板張りをした。翌1850年には，30本の植木を植え，柵を作り，井戸掘りもしている。そして，同年最後の記入の9月28日には「小麦の脱穀を終る。355ブッシェルで，平均エーカーあたり17ブッシェルに少し足りない程度」とある。この年も，いく分害虫の被害はあった模様だが，上記の平均収量はそう低いものではない。当時のイリノイにおける春小麦のエーカーあたり収穫量は10～20ブッシェルとされているからである。農場売却の際，ベイカーへの支払いとあるのは，土地を購入したとき，彼から借金をしたものと思われる。ただ文章の調子からして，借金の返済ができず，やむを得ず農場を手放すという感じではない。(11)

もちろん，フランシスはイリノイの生活にすっかり満足していたわけではない。到着した翌年，農産物市場の状況にふれ，「小麦商人，投機家が，市場と農民を思いのままにあやつっている。農民は大体借金をしているので，安い値段でも売らざるを得ない」(47.1.1) とある。また，多分，陪審員として裁判に出たときの感想として，「法廷に，私のこれまで見た最も優秀な弁護士がそろっているとは云えない。シカゴのブラウンはなかなか良く，ベックもまあまあだが，他は標準以下」(47.4.25) などと手厳しい。しかし，たまには骨相学の講演を聞いて「その正しさを確信するようになった。……学校で教えるべきだ」(45.12.21) と考えたり，「ジョン・ギリーズの世界史を読む。……これはあまり人気のある書物ではないらしいが，それでも面白い」(47.1.5) とか，「なにか昔のような気分だ。というのも，ボストン・ステイツマン紙を読む楽しみを再び持てたから」(47.11.24) などと書いたりしている。農民としての暮らしを考えるならば，ヴァモント時代よりは良かったように思われる。(12)

ところで，同じイリノイ州中部のスプリングフィールドから，フランシスより丁度1年先にオレゴンへ移住したデイヴィッド・ニューサム (David Newsom) という人物がいる。彼は375エーカーの土地と多くの家畜を有する豊かな農民であったが，1851年4月に，妻と6人の子を連れて，オレゴンへ向け出発している。ニューサムは45歳であった。イリノイ生活の満足度という点からすれば，ニューサムの場合は，フランシスより，はるかに高かった筈である。しかし，彼等の移住を報ずる土地の新聞によれば，多くの住民がオレゴンを目指しており，それは「当郡の最良の農民を含み，十分な資金を有する」人びとであった。同じ新聞によれば「安楽な家を去り，より大きな利益のため」オレゴンへ移住するのであった。ニューサムについては，フランシスとの比較のため以下でふれるが，移住の理由に関するヒントを与えてくれるように思う。(13)

注 (11) Francis Diary, 49.10.19; 49.10.22; 49.11.2; 50.4.20; 50.5.25; 50.8.17. 小麦収量については次を参照。Fred Gerhard, *Illinois as It Is* (Chicago, 1857), p. 292.

(12) 骨相学は当時人気のある「科学」であり，有名な教育家ホレイス・マンも興味を持ったという。John D. Davies, *Phrenology: Fad and Science, A 19th Century American Crusade* (New Haven, 1955). ギリースの世界史とは，次のものであろう。John Gillies, *The History of the World, from the Reign of Alexander to that of Augustus* (London, 1807; Philadelphia, 1809).

移住にはプッシュとプルの要因があると云われる。フランシスがヴァモントの故郷を離れるにあたっては，プッシュの要因が強く働いたと云えよう。しかし，今回のイリノイからオレゴンへの移住の際には，オレゴンが引きつけるプルの要因が強かったのではないだろうか。ニューサムにしてもそうである。太平洋岸の新たなフロンティアは，もはや若者とはいえぬ家族持ちのフランシスを引きつける魅力を持っていたのだ。

2

オレゴンは1840年代前半からアメリカ人開拓者を引きつけていた。最初はキリスト教伝道の目的が掲げられたが，ウィラメット川流域の農業可能性が最大の魅力であった。イギリスとの境界問題は1846年の協定で解決され，カリフォルニアで金が発見される以前から，この地域への移住案内書も出版されていた。しかし，大陸を横断して太平洋岸へ移住する者が急激に増大したのは，云うまでもなく金発見のおかげであった。ゴールド・ラッシュ以前の大陸横断移住者は40年代すべてを合計しても15,000足らずと推定されるが，その数は1849年には1年間で約25,000，1850年には50,000と激増したのである。(14)

その結果，移住路や方法に関する情報も増加し，川の渡し場等の施設も作られた。カーニイ，ララミー等，連邦軍隊の駐屯地もあり，モルモン教徒がソルトレイクに移住開拓していたことも，食料補給等に好都合であった。とはいえ，フランシスが移住した1852年においても，太平原からロッキー山脈を越え，更に荒野を経て太平洋岸に至る2,500マイルの旅は容易ではなかった。ニューサムは，オレゴンへ到着した後に「ここまでの旅の危険，労苦，心労，道徳的堕落，そして損失は非常なものなので，合衆国で良い健康な生活をしている家族には，決して移住せよとは云わない」と書いている。(15) フランシスは4月20日にイリノイを発ち，10月14日にオレゴンに着いているが，その間の日記は，淡々とした記述の中に，この旅の困難さを示している。なおフランシスは最初からオレゴンを目指しており，カリフォルニアの黄金に惹かれた様子はない。一獲千金を狙う旅ではなかったことは明らかである。(16)

さて，最初に旅程のあらましを図と表に示しておこう。オレゴンへの道には，軍の砦や，目標になる岩山，峠，泉などがあり，ほとんどの旅行記，日記がそれにふれている。それらの地点を，フ

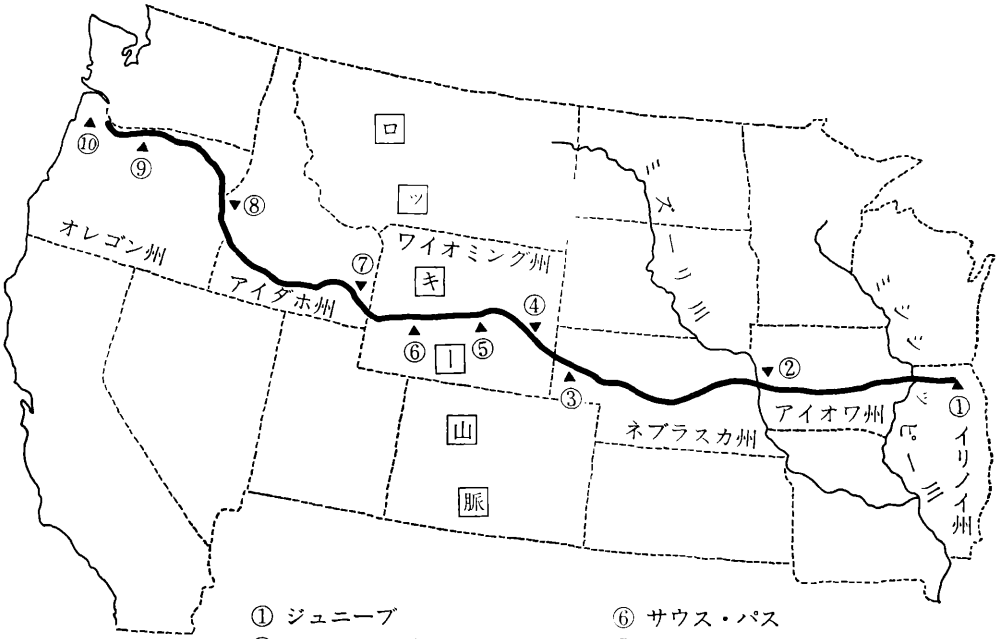
注 (13) ニューサムは，オレゴン移住およびその後の状況を，故郷の『イリノイ・ジャーナル』紙に書き送った。それらに加え，後年オレゴンの新聞等に寄稿した文章が下記に収められている。*David Newsom: The Western Observer, 1805–1882,* introd. E. Earl Newsom (Portland, 1972), P. 12. なお，以下，本書からの引用は，Newsom, 執筆年月日，頁数という形で注記する。

(14) John D. Unruh, Jr., *The Plains Across: The Overland Emigrants and the Trans-Mississippi West, 1840–60* (Urbana, 1979), pp. 119–20.

(15) Newsom, 53. 8. 15, p. 53.

(16) 移住者がオレゴンを目指すか，カリフォルニアを目指すかという点については下記を見よ。Dorothy O. Johansen, "A Working Hypothesis for the Study of Migration," *Pacific Historical Review,* 36 (1967), 1–12.

オレゴンへの道



① ジュニーブ
② カンスル・ブラッフス
③ チムニー・ロック
④ ララミー砦
⑤ インディペンデンス・ロック
⑥ サウス・パス
⑦ ソーダ・スプリングス
⑧ ボイシ砦
⑨ ダルズ
⑩ オレゴン・シティー

表1 オレゴンへの旅程

	フランシス	ニューサム
イリノイ州内の町出発	4月20日	4月3日
ミシシッピ川	4 29	4 20
カンスル・ブラッフス	5 26	5 15
チムニー・ロック	6 19	?
ララミー砦	6 23	6 29
インディペンデンス・ロック	7 2	7 9
サウス・パス	7 10	7 16
ソーダ・スプリングス	7 24	7 30
ボイシ砦	8 27	?
ダルズ	10 3	9 22
オレゴン・シティー到着	10 14	10 2

ランシスが何月何日に通過したかを表に記し，参考として，ニューサムの場合も付しておいた。(17)

フランシスがイリノイ州ケイン郡のジュニーブを出発したのは4月20日である。ほぼ真西に進み，フルトンの町でミシシッピ川を渡ったのが4月29日，アイオワ州を横切って，カンスル・ブラッフ

注 (17) 移住者のルートは，下記に地図がある。Ray Allen Billington, *The Far Western Frontier, 1830-1860* (New York, 1956), p. 97; Unruh, p. 212.

ス（別名ケインズヴィル）に着いたのが5月26日である。この町は，オレゴン，カリフォルニアへの旅行者が仕度を整える出発点の一つで，ここからが本来の大陸横断の旅となる。先ずミズーリ川を渡り，今日のネブラスカ州をプラット川沿いに進む。アッシュ・ホロウ，チムニー・ロック等を経て，現在のワイオミング州へ入りララミー砦へ6月23日に着いた。旅の道標として名高いインディペンデンス・ロックを7月2日に通り，ロッキー山脈のサウス・パスを7月10日に越える。これが分水嶺であるが，旅は半分ほど終った程度で，ここから難路がひかえている。カリフォルニアとの分岐点ソーダ・スプリングスを7月24日に経て，今日のアイダホ州を進む。ほぼ1カ月かかって，オレゴンとの境にあるボイシ砦に8月27日に着く。道を北西にとって，コロンビア川の支流をいくつか渡り，ダルズの近くに着くのが10月3日，目的地オレゴン・シティーへは10月14日に到着した。

ニューサムは，フランシスより早く4月3日にイリノイの町を発ち，カンスル・ブラッフスを5月15日，サウス・パスを7月16日に通過，オレゴンのポートランドに10月2日に到着している。全体としては，フランシスとほぼ同様6カ月を要しており，経路も大体同じである。すでに記した如く，砦や峠，あるいは川の渡し場などにより，オレゴンやカリフォルニアへの道順は，ほぼ決っていたらしい。いく分後の案内書には，何千もの旅行者が通った道であるので，道ははっきりついており，迷う心配はないとある。ミズーリ川沿いの町を4月頃出発するのも，冬になる前に太平洋岸に着くために，通例のことであった。もっとも，あまり早く出てしまうと太平原の草が生えそろっておらず，幌馬車を引く役畜に飼料を与えねばならなかった。なお，馬車と書いたが，役畜には馬より牛が適していると案内書にもあり，ニューサムも同じ意見であった。フランシスは，こうした点を含め，旅の大略についての知識は持っていたらしい。(18)

フランシスが他の家族と同行することは，すでに記したが，ニューサムの場合も8家族が一緒である。通常の西部移住は必ずしもグループでおこなう必要はないが，オレゴン，カリフォルニアへの旅は，いわゆる幌馬車隊を組み，集団で移動する必要があった。牛馬の見張りや，川を渡る際の協力，さらにインディアンへの防備など，単独行動では困難が大きすぎたためである。フロンティアといえば個人主義という言葉がすぐに念頭に浮かぶが，まさにフロンティアへの旅であった大陸横断には，団体行動が必要であった。もっとも，「この旅では，さまざまな光景と人間性を見ることができる。サンガモン（イリノイ）では二流三流と思われていた人間が優秀であることが分ったり，その逆であったりする。この旅は，人間の強さ，主義主張への試煉である」とニューサムが書いているように，精神的にも肉体的にも強靱さの求められる旅であった。(19)

ミシシッピ川，そしてミズーリ川を渡るまでは旅も序の口であって，道もそう悪くない。「カリフォルニアへ行くウィルソンの一行と，オレゴンへ行くシェパードが追いついた」(52.4.24) とか，「今日は急いで進み，19台を追いこした」(52.5.15) などとフランシスが書いているので，次々に

注 (18) Randolph B. Mercy, *A Hand-Book for Overland Expeditions* (New York, 1859), p. 20.
(19) Robert V. Hine, *Community on the American Frontier* (Norman, 1985), pp. 49-69; Mercy, p. 22; Newsom, 51. 4. 20, p. 14.

移住者が連なっていることが分かる。「テントを張り，ストーヴに火をおこし，家畜に飼料をやり，夕食をすませて休む」(52.4.28) とか，アイオワ・シティーで乾草を買う (52.5.6) 記入の後，5月7日に「はじめて，草原に家畜を放す」とあるので，それまでは家畜に飼料を与えていたものと思われる。一日に進む距離は12〜18マイルであった。案内書によれば，旅の成否は役畜の世話にかかっており，とくに最初のうちに酷使してしまってはならない。ロッキー山脈を越え，砂漠に入った際に，十分な体力を保っていることが大切で，一日の行程は，16〜18マイルなら無理がないとある。フランシスの進む速度は丁度適当であった。(20)

5月23日は日曜日，フランシスは次のように書く。「人家から，はるかに離れた淋しい草原にいる。礼拝の集会はない。20もしくは25マイルの間には一軒の家もない。おお，神よ，われらをあわれみ給え。われらをつつましく弱き者とし，互いに耐え忍ぶよう助け給え。」その3日後，カンスル・ブラッフスに着き，食料を補給し，5月27日ミズーリ川を渡る。「とうとうミズーリ川を越え，日没少し前にインディアンの土地に上陸した。川幅は80ロッド，深さ50か60フィートで，川の水は土色か乳白色で流れは早い。東岸でオマハ族のインディアンを見た」とある。インディアンに対する警戒心は強く，「大勢の移住者と一団を組んで野営した。幌馬車で輪の形を作り，中に家畜を入れて，インディアンから守った」(52.5.31) などとある。

インディアンの脅威が，どの程度現実のものであったかはともかく，ニューサムも，ほぼ同じ地点で，幌馬車40台の隊を組んでいる。フランシスも「仲間の隊に追いつくため遅くまで牛を進める」(52.6.4) こともあった。しかし，不都合も生じる。本来，日曜日は聖日とし，移動しない筈であったが，そうも云っていられなくなる。6月6日の日曜，フランシスは記す。「われわれが加わった一行は，今日も移動することを好んでいる。インディアンのためとか，時期が遅いからとか，はなはだ説得力のない議論だと思う。しかし，単独で旅をするのは不用心と考え，彼等と一緒に行く。」この件については，その後もしばしば記入があり，「主日に休むことだけは守られたが，ひとりで礼拝しなければならない。」(52.7.4)「今日も，働いてはならぬとの教えにもかかわらず，前進を続ける。」(52.7.11)「ほとんどの人は，主日を無視する。たとえ旅を続けないとしても，狩りをしたり，魚釣りをしたりする」(52.7.18) などと書かれている。ニューサムも主日が守れないことを記しているが，これは真面目な信者にとっての悩みであったと同時に，旅が続くなかで習慣が崩れていったことを示している。(21)

旅の途中には，目を楽しませるような風景がないわけではない。フランシスは6月19日，チムニー・ロックとコートハウス・ロックの場所を通る。今日も，当時のスケッチとほぼ同じ形をしている岩山であるが，「奇妙な形をした芸術品」と書いている。インディペンデンス・ロックは「6〜700フィートの幅がある裸の岩山で，あまり長く止まらなかったが，名前や日付が沢山書いてあっ

注 (20) Mercy, pp. 44-5.

(21) 移住と主日の礼拝の問題については次にもふれられている。とくに，女性にとって辛かったとある。Julie Roy Jeffrey, *Frontier Women: The Trans-Mississippi West, 1840-1880* (New Yor, 1979), pp. 42-3; Newsom, 51.11.28, p. 30.

た。」(52.7.2) 次の日にはデヴィルズ・ゲイトを通る。「岩山の間をスウィートウォーター川が，ほとばしり流れている。崖の高さは400フィートくらい。岩が二つに裂かれたかのようだ。岩山の上に登ると大変良い景色だったが，降りてから振り返ると，誰も登ろうとは思わぬほど急だ」(52.7.3)とある。やがて「雪をいだいた山々を，初めて見る」(52.7.7) ことができる。そこからは曲りくねった山道を登り，7月10日「サウス・パスと呼ばれる場所を通った。高度7,400フィートである。……これまでは上り道だったが，ここからは下りとなる。パシフィック・スプリングスで野営する。きれいな水だ」とある。

このパシフィック・スプリングスは，峠を越えて3マイルほど行ったところにある最初の泉で，ニューサムも「良い草と，澄んだ水と，燃料になるセージの茂みがある。野生の獲物も豊富だ」と書いている。[22] パシフィック・スプリングスという名はともかく，太平洋岸までは，まだ遠い。いくつかの流れを，50セントから3ドル程度の渡り賃を払って越え，フランシスは7月24日「有名なソーダ・スプリングスに着く。水はなまぬるく，酸味のないソーダ水のような味で，岩の割れ目から泡立って出ている。……もうひとつの泉は，よりきついビールのような味だ。……ベア川は山をまいて南へ流れ，ここがカリフォルニアと，オレゴンへの道の分岐点だ。」

それ以前にも困難な事態はあった。6月7日には「ある者は病気で，赤痢やコレラによる死者も出た」とあるし，6月9日には「毎日，死者が出たという話を聞く。しかし，われわれは神のおかげで元気だ」と書いている。また，ララミー砦の近くでは，「また水がなく，草も少い」(52.6.23) といった記入が続く。「今日は28マイルも旅したが，草がない」(52.6.30) という日もあった。しかし，実際の難路は，サウス・パスを越えてからであった。8月3日「野生のセージの生える荒野。砂埃で人も牛も窒息しそうだ。多くの牛の死骸が道端にころがっている。砂埃で死んだと考える人もいる。角はうつろで尾もおかされている。毎日，死んだ牛のそばを通る。また，多くの牛が足を痛めている。これには，鉄を熱し，ひづめの裏に松脂をつけ，焼いてやるのがよい」とあり，「牛の食べる草がない」(52.8.8) とか，「道は山坂が多く，砂地で牛は苦しそうだ。野生のセージと砂ばかり。天気は2週間変らない」(52.8.10) などとある。野営地に着いても，「死んだ牛がころがっているので，われわれの健康を考え，4マイルほど先の良い水と草のあるところまで行った」(52.8.15)という場合もある。8月15日は日曜日であったが，もはやフランシスも旅を続けることに苦情を云っていない。

8月23日，ボイシ川に着く。ようやく砂漠は終り，樹木を目にすることができる。「ボイシ川はきれいな流れで，この大きさの川としては，水はかつて見たことがないほど澄んでいる。インディアンと取引して，鮭を手に入れた。彼等には食事とブリキの茶わんをやる。この鮭は，今までに食べた中で一番美味しい魚だ」(52.8.24)とある。8月27日「一行の中に病人が出たので休み，私はボイシ砦へ歩いて行った。ハドソン湾会社に雇われた男が一人だけいる。彼等はインディアンと取引し，毛布，シャツ，弾薬，ペンキ等と引きかえに毛皮を手にいれる。彼の話では，ほんの2シリン

注 (22) Newsom, 51.7.16, p.24.

グほどの物を渡して，100ドルの価値のある毛皮を受け取るそうだ」(52.8.27) と書いている。フランシスは，すこし後にも「カユーズ族のインディアンが大勢いる。豆やじゃがいもを買った」(52.9.13) などと記しており，旅の最初の頃のインディアンに対する緊張感は見られない。

険しい道は，今日のオレゴン州に入っても続く。「ここは丘陵というより山岳地帯だ。道は山の中で上り下りし，曲りくねっている。川も非常に蛇行しており，山がせまっているので，道は川にそって進めない」(52.9.2) とか「ようやく，グランド・ロンドに着く。長く，急で，でこぼこの道を下った」(52.9.7) とか記されている。草を食べている牛が見つからなかったり，同行の者が荷車をこわしたり，一日の行程で川を三度も渡らねばならぬこともあり (52.9.1)，困難が多いので，9月8日には「ここで休み，オレゴンの人を待つ。彼と一緒に行く積り」と書いている。ニューサムは，この年すでにオレゴンにいるが，8月下旬「移住者が到着しはじめた。プラット川両岸でコレラが流行し，旅の後半では草が少く，大変苦労したという。後から来る者に食料などを届けてやらないと，オレゴンへ着く前に多くが死んでしまう。先着の者によれば，4,000台の幌馬車と，20,000人の人がオレゴンへの道をたどっていると云う」と書いている。そして10月2日には，「多くの市民がカスケード山脈を越えて，友人を迎えに出かけた。同時に，多くの卑劣なペテン師が，移住者から金を巻き上げようと出かけた。ここに約1,600台の幌馬車や牛馬が到着したが，一家そろって無事だった者は少い。……昨年は苦しい思いをし，辛い光景，あわれな牛，やせこけた人を見た。しかし，もう苦情は云わない」と記す。フランシスの移住した年は，苦難の多い年であったようである。(23)

コロンビア川の支流のアマティラ川や，ジョン・デイズ川にそい，あるいはそれを渡る道も悪路が続く。9月23日，ジョン・デイズ川を渡り，渡し場近くで小麦粉を買い，ポンドあたり50セントを支払っている。ニューサムの記すところでは，その年は食料価格が高く，小麦粉1ポンド10セントしたとあるので，旅行者は5倍の価格を払わされたことになる。10月2日，「数日前から，雪をいただくフッド山がはっきり見える」と記す。このあたりから道も良くなり，草や水も十分にある。樹木も多く，気候は快適で，夜は涼しい。10月12日，フォスターという開拓民の家に着く。「彼は良い農場を持っており，開墾されたところは平らだ。ティモシー（牧草）も良く育っている。オレゴンの素晴しい小麦の話を聞いたことがあったが，その話は本当だ。粒が大きく，色はうすい」とある。そして，10月14日，ウィラメット川沿いのオレゴン・シティーに着く。道を間違えたので，少し暗くなってからだった。明くる日，2マイルほど離れた別の開拓民の家まで行く。「非常に親切に迎えてもらった。食事をつくり，数日間そこに留る」と6カ月間の旅を終えたフランシスは書いている。

注 (23) Newsom, 52.8.27, p.44; 52.10.2, p.45.

3

オレゴンはすでに合衆国の領土ではあったが，やはり遠く離れた土地であった。大陸の横断を終えた1852年の12月31日，フランシスは日記にこう書いた。「一つの年が去り，新しい年が始まろうとしている。私は故郷からも，友人からも，親類縁者からも，遠く離れた新開の地方で，見知らぬ人々の土地で，再び新たに生活を始めようとしている。おお，神よ，われらをあわれみ給え。」

7年前に，一度は西部への移住を経験したフランシスであったが，太平原とロッキー山脈を越えての旅は，かつての旅とは著しい相違があった。距離や日数のみならず，困難や危険の大きさの点で，質的に異っていたと云って良かろう。ヴァモントからイリノイへの旅では，駅馬車や船に故障が生じようと，日程が遅れようと，生命の危険はなく，旅に失敗することなどありえなかった。しかし，オレゴンへの旅では，幌馬車がこわれたり，牛が病気になったりすれば，目的地に着けなくなる恐れがあった。かつての西部移住では，移住後に上手くいくか否かが，移住の成否を決めた。しかし，今度は，移住の旅そのものに成功するか否かが，まず問題であった。

もっとも，フランシスは，出発にあたってそれほどの困難さを覚悟していなかったのかもしれない。旅の途中でも，どちらかといえば楽観的で，サウス・パス，ソーダ・スプリングスを越えてしばらく後の8月4日に，「良い天気が続く。オレゴンの前触れか，風の向きが変った」などと書いている。オレゴンへ着くのは，2カ月も先のことである。楽観的という点では，ニューサムも同じであった。彼には，インディペンデンス・ロックで男の子が生れている。「母も子も無事オレゴンに着いた」とは云え，身重の妻を連れて出発したこと自体，旅の難しさを軽く見ていた証拠ともいえる。ニューサムのイリノイ出発は4月3日，男子の誕生は7月9日前後であったから，旅の途中での出産は予想されていたに違いない。それにしても，危険を冒しつつも移住した彼等を，何が引きつけたのか。オレゴンの魅力とは何だったのか。(24)

キリスト教の伝道の如き特殊な目的を持っていたり，カリフォルニアの黄金に目がくらんだのであればともかく，フランシスやニューサムが何故移住したのか，いささか理解に苦しむ。フランシスは民主党の領土拡大政策を支持していたし，「オレゴンの素晴しい小麦の話」を聞いていたが，それだけでは説明不足であろう。なお付言すれば，ニューサムは民主党に反対で，共和党を支持した側の人物である。

ところで，当時ボストンで出版されていた『ノース・アメリカン・レビュー』という有名な雑誌がある。その1849年7月号は，ゴールド・ラッシュの影響もあって，フランシス・パークマン等の西部旅行記を紹介しているが，旅行記そのものは金発見以前に執筆されていたし，すでに太平洋岸への移住者も存在したので，次のような文章を載せている。「まだ1オンスの金もサクラメント川の岸辺で発見されていなかったとき，いったい，いかなる幻影が，移住者を西部の荒野を越えて引

注 (24) Newsom, 51.7.9, p.22.

きよせたのか。」安く手に入る豊かな土地などという筈はない，と筆者は云う。それならば，もっと近くにも存在する。「イギリスとの戦争を望んで大口をたたいた政治家すら，オレゴンはミシシッピ川流域より豊かで魅力的だとは云わなかった。」中西部には，まだ未墾の土地も多く，政府の公有地も存在している。「ミズーリからオレゴンへ行く一人分の旅費以下で，100エーカーの土地が手に入る。……オレゴンやカリフォルニアへの旅の道ぞいにも，豊かな土地はいくらでも存在する。」それなのに何故，まだ金も発見される前から，人々は太平洋岸へ移住したのか。

多分，ボストンの人間で，西部移住者に同情しなかった論者の考えはこうである。「故郷に対する愛着の欠如，放浪と冒険への満たされることなき渇望」それが中西部の住民の特徴なのだ。しかも，彼等の多くはごく最近，中西部へ移住してきたのである。「オハイオ川やワバッシュ川の岸辺にたどりついたばかりで，はやサクラメント川やコロンビア川を目指している。彼等の放浪癖が，アレガニ山脈を越えさせ，ロッキー山脈へ駆り立てる。」いわば国民性や民族性に比すべき，西部の住民の性格あるいは気質が，彼等をオレゴンやカリフォルニアへ向わせたという訳である。(25)

安い土地は中西部にも，旅の途中にもあることは事実である。フランシスもアイオワの「すばらしい土地」や「最良の草原」について書いている。(52.5.10/5.13) ただ，オレゴンには，1850年に成立した無償土地譲渡法があった。これは320エーカーの公有地を，4年間の開墾を条件に，18歳以上の開拓民に，無償で与える寛大な法であった。既婚者の場合は，妻にも同じ面積の土地が与えられた。但し，これは1851年12月1日以前に居住していた者に限られ，その後の移住者については，1853年12月までに移住した21歳以上の白人男子，およびその妻に各160エーカーの公有地が与えられた。当時，合衆国の公有地はエーカー当り1ドル25セントで売却されており，開拓民が無償で取得できるようになるのは，1862年にホームステッド法が成立してからであった。したがって，オレゴンの土地法は，その頃としては，開拓民にとって極めて有利な法律であって，移住への有力な誘因になったと考えて良かろう。(26)

フランシスは，この土地法については何も書いていないが，その存在は多分知っていたであろう。移住先の土地に関する情報は，誰もが求めていたものだからである。先に記した通り，52年10月14日，オレゴン・シティーに到着した彼は，翌日ウィリアムズという開拓民の家に泊り，数日間休息する。そして10月18日，ウィリアムズの近くの土地をいくつか下見する。しかし水がなかったり，平坦でなかったりするため，気に入らない。10月21日，トッテンという者の家に移り，そこの土地を見る。「私はここを取得しようと思う。シティーから3マイルだし樹木が多く，開けた部分もある。市場の近くに住めば，何か売るときに時間の節約になる。もし牛乳があれば町へもっていって売れるし，薪も良い値で売れるが，市場から離れたところに住めば，それができない」とフランシスは書く。

彼が正式にその土地を入手したのは翌年になってからであった。1853年2月9日に「ジェイムズ

注 (25) *North American Review*, (1849), 181-83.

(26) James M. Bergquist, "Oregon Donation Act and the National Land Policy," *Oregon Historical Quarterly*, 58 (1957), 17-35.

・トッテンから申請地を300ドルで買った」とあり，翌々日に「320エーカーを私の申請地として登録してきた。樹木を焼き払い，開墾を始めた」と記入している。オレゴンの公有地は本来無償で取得できる筈であったが，上の記述からも分かるように実際にはそうでもなかった。良い土地は先着の移住者が取得申請してしまい，その権利を後から来た者が買うのである。フランシスが300ドルで購入したのは，その権利であって，改めて自分の取得希望地として申請したわけである。先着の移住者の行為は法的に認められていたわけではないが，早く来た者の権利として黙認されていた。ニューサムも，他人の申請地の権利を購入している。[27]

土地が無償で取得できず，他人の権利を買わねばならぬとしても，320エーカーの土地を300ドルで購入できることは魅力であったろう。フランシスがイリノイで売却した土地は，開墾済みとはいえ，エーカー当り11ドルであった。320エーカーとなれば，最低3,000ドルは必要ということになる。他方，オレゴンではイリノイより更に人手不足で賃金は高い。当然，カリフォルニアの金にひかれて，多くの者が行ってしまったという事情も加わっている。ニューサムの記すところでは，1852年，賃金は日給2～3ドル，収穫期には日給4～6ドルとある。フランシスは移住当初，製材の仕事を手伝い，夏には農作業もしているが，小麦収穫に日給4ドルを受取っている（53.7.3)。安い土地と高い賃金はフロンティアの一般的特徴であるが，オレゴンでは特にそうだった。[28]

ところで，フランシスがヴァモントからイリノイへ移住したとき，新しい土地が気に入ったことは前に述べた。今回はどうか。到着後しばらくたった11月3日の日記を見よう。「晴，良い天気で，北の風だ。オレゴンは良い所だと思う。天候は素晴しい。オレゴン・シティーの近くは森が深すぎて，あまり気持良くないが，農場の開墾が進めば，良くなることだろう。」同年12月23日，「雪。全部で16～18インチは積った。オレゴンにしては多い。古くからの開拓者は，これほど雪が降ったり寒かったりしたことはなかったという。……しかし，雪が降るとすれば，ここの雪は，今まで知っている中では一番良い。それは静かに降り，雪が止んだ後も静かだ。ここは風がない」とある。翌1853年4月8日には「月曜以来ずっと良い天気が続いている。ここは，なんと素晴しい気候の土地だろう。私は今まで住んだどの場所とも取り替えたくない。風が吹き荒れることはなく，晴れても曇っても，静かで穏やかだ」とある。冬の厳しかったニューイングランドや，吹雪に見舞われることの多い中西部に比べ，太平洋岸北部の気候は，ずっと穏やかであった。

もっとも，フランシスとしては，オレゴンを気に入る必要があったとも考えられる。イリノイを去り，苦しい旅を続けて到着した土地の良さを，自分に云いきかせることで，自らの行為を正当化したとも思われるからである。フランシスの場合は，自分だけが読む日記であったが，ニューサムの場合は，移住を正当化する必要性が一層高かったかもしれない。彼はイリノイの前住地の新聞に，「オレゴン便り」という形で，ほぼ定期的に寄稿していたからである。1852年6月15日付で，彼はこんな風に書く。「私は以前，5月6月にイリノイの草原が花盛りになるのは，最も美しい光景だ

注（27） Newsom, 52.3.14, p.39; 54.2.14; p.55.
（28） Newsom, 52.8.27, p.44.

と思っていた。しかし，野生の草花や木々の美しさ，あざやかさ，そして種類の多さにおいて，ウィラメット川流域は何処よりも勝ると云わねばならない。」また同年8月27日付で，「私はオレゴンに満足している。私は自分の大変価値のある土地に満足し，太平原の旅の損失と苦難を十分に補った。私はイリノイを去ったことを，決して後悔していない。もし私が今ほど成功していなかったとしても，私はこの土地に満足していただろう」と記す。ニューサムは土地を取得し，製材所を建設して，たしかに成功していたが，移住を後悔しないことを，その後，何回も繰り返して述べている。(29)

フランシスやニューサムは，自分達の移住の動機を『ノース・アメリカン・レビュー』の論者が云うような放浪癖であるとは考えなかったであろう。とはいえ，安い土地や高い賃金だけが目当てであったとも思わなかったに相違ない。彼等が素晴しい気候や，野生の植物の美しさについて語っているのは，経済的動機だけでオレゴンへ移住したのではないことを，自分や他人に云いきかせているようにも感じられる。

なお，大陸横断の移住の費用についてふれておこう。フランシスの日記からは，残念ながら，いくらかかったのか知ることができない。ニューサムは旅の「費用と損失」の合計は2,375ドルと書いているが，費用の部分がどれ位か不明である。彼は多くの家畜を連れていって，途中でそれを失っているし，旅の最後で400ドル分の荷物を盗まれたりしているので，損失の部分が多いと思われる。(30) 東部から中西部への旅と異なり，船賃などの均一部分は少く，しかも幌馬車や役畜を新たに購入したか否かで，話は大きく異なってくる。ある書物によれば，こうした準備の段階で800ドルから1,200ドルは必要だった。旅に出発した後は，渡し場，有料の橋，食品購入などの費用がかかるが，ゴールド・ラッシュでカリフォルニアへ行った者の場合，1人当り50ドルから200ドルとある。1853年，インディアナからオレゴンへ，家族ほか11名で移住した者の記録では，カンスル・ブラッフスまでに340ドル，そこでの旅仕度費用に230ドル，あとオレゴンまでが270ドルとなっている。準備費用を入れれば，この家族の移住には，少く見積っても1,500ドルかかった筈だと研究書にはある。ともあれ，金銭的にも負担は大きく，到着した土地を気に入らねばならなかったのではないか。もはや西方に土地は拡っておらず，あとは東部へ戻るほかはないからである。(31)

4

例の『ノース・アメリカン・レビュー』の論者は，絶えざる西部への移住が，わが国民を野蛮状態に引き戻すとまでは云わないが，「文明の先駆と，好意的に呼ばれることもある開拓民は，実は，法律，教育，学芸などの文明を置き去りにしてゆくのだ」と述べている。(32) オレゴンへの旅の途中で，

注 (29) Newsom, 52.6.15, pp.39-40; 52.8.27, p.43.
(30) Newsom, 51.11.28, p.28.
(31) Dorothy O. Johansen and Charles M. Gates, *Empire of the Columbia: A History of the Pacific Northwest* (New York, 1957), p.257; Unruh, pp.405-8.
(32) *North American Review*, p.183.

主日が無視されたことについては記したが，到着後もその状態が続いた。「オレゴン・シティーより近くには，主日の集会はない。身体の調子が良くなかったので行かなかった。人々は礼拝の会や宗教について，あまりかまわないようだ。」(52.10.31) とか，「ここでは人々は安息日をそれほど守らない。彼等は今日も荷車に牛をつけて，乾草を運びに行く。」(52.11.7) などとフランシスは書いている。

文明を置き去りにしたか否かはともかく，オレゴンへの移住者は，合衆国を離れたことを感じていた。東部から届いた新聞を読んだフランシスは，「合衆国からの新聞を読むのはとても面白い。合衆国から離れていたので，バラバラになった鎖の輪を，またつなげているような感じがする」(53.3.22) と書く。ニューサムも「合衆国からの移住者」とか「合衆国からの食料品や商品」などという書き方をしている。「神は大西洋岸と太平洋岸の開拓地の間に，障壁を置かれたかのように見える。人間は，その不可能さを乗りこえんと太平原の旅にいどみ，その軽率さの報いに高い代償を支払う」というのが，ニューサムの考えだった。(33)

イリノイなど，旧北西部の土地は，東部の定住地の辺境が，次第に西へ拡っていくという形で開拓されたので，連続性を有し，一体感も保っていた。オレゴンの場合，地理的に隔りが大きいということのほかに，別の問題があった。それはカリフォルニア，そして1850年代に入って，オレゴンでも発見されるようになった金鉱の存在である。フランシスは小麦，そして果樹栽培をおこなったし，ニューサムも製材所のほか果樹園を経営していたが，そのような地道な経済活動は，なかなか根付かなかった。フランシスも，オレゴンへ移住して何年かたってから，「良い農業地域だが，……多くの者は金鉱へ向った。彼等はオレゴンの災いのもとだ」(61.7.13)と云っているが，この点についてはニューサムがより詳しい。

金鉱が，オレゴンの農産物に良い市場を提供し，高価格をもたらすことは，ニューサムも認める。しかし「農業は，まだ幼年期にあり，金鉱はそれを日陰に入れてしまう。一獲千金の夢が，あまり多くの男性人口を連れ去ってしまうので，ここでは，ほとんど生産がされない。……確実な富の源泉は，土地を耕すことなのだ」と1853年に記す。さらに，金鉱の存在が，オレゴンと合衆国との関係に，いかにかかわっているかについて，その5年後にこう書いている。「われわれの血液たる金は，過去何年もの間，すぐに合衆国に流れていってしまい，われわれの金融業者は困っている。われわれの市場向生産物は，合衆国の同種の産物と競争している。ここでの賃金はあまり高いので，われわれの生産者は利益を上げられない。」「カリフォルニアの金鉱は，オレゴンの真の利益のさまたげだ。金鉱のため，賃金が非常に高く，釣り合いをとるため，輸出用あるいは地元消費用の産物価格も高くなる。」その結果，外から大量の産物が入ってきて，われわれは競争できない，というのがニューサムの見解であった。なお，外部からの産物は陸路でなく，海上輸送で入ってきた。(34)

こうした環境の下で，フランシスは樹木を焼き払って開墾をし，他人の農場や製材所で働くが，

注 (33) Newsom, 51.11.28, p.30; 53.3.11, p.49; 53.4.17, p.51.
(34) Newsom, 52.8.27, p.43; 53.1.26, p.48; 58.2.2, p.73.

オレゴンでは果樹栽培が有利なことを知った。1853年12月には，リンゴや桃，梨などの苗木を植え，翌年の春はその手入れで忙しかった。もっとも，54年夏には身体の具合が良くないといった記入が見られる。そして，冬場は伐木や製材の作業をするのが常であったが，その年の10月中旬からは，オレゴン・シティーの商店で4カ月程，店員として働いた。やがて，長男のアルビオンも農場の仕事を手伝える年齢となる。数年後の日記には「アルビオンが道路工事で働く」(61.6.13) とか「アルビオンは木を切る」(61.6.17) といった記入がしばしば見られる。他方「ここのところ，リンゴを干すのが，われわれの仕事」(61.8.30) とか，「リンゴを50箱売る」(62.3.8) という記載もあるので果実の生産は順調にいった模様である。ただ，小麦等の販売の記入がないかわりに，「小麦を買い製粉し，果実を買い積出すという商売を共同でする話をした」(61.11.9) とあったり，知人に誘われて，悪口を云いつつも自分も金鉱探しの旅に出かけたり (61.7.22) しているところから見て，農業より商業や金発見の利益に心を動かされた様子もある。

1860年の国勢調査の記録によれば，フランシスはクラックマス郡オレゴン・シティー地区に住み，46歳，職業は農業で，不動産4,000ドル，動産500ドルを所有する。妻エリザベス，41歳との間に8人の子供がある。アルビオン（男，17歳），マリオン（女，16歳），イモジーン（女，14歳）まではヴァモント生れ。次のヘンリエッタ（女，12歳）とクラレンス（男，9歳）はイリノイで生れた。オレゴンへ到着してから生れたのは，アイダ（女，7歳），エステヴァン（男，5歳），アルシアン（男，1歳）である。長男が生れたときには，日記に長々と感想を書きつけたフランシスであるが，後になると簡単になり，「夕方，娘が生れた」(53.9.18) などとあるのみである。なお，1861年には金発見が伝えられたので，教会のキャンプ・ミーティング参加を兼ねて旅に出たが，帰って来た日に，もう1人娘が生まれた。ドーラという名を付けている。[35] (61.8.10)

ところで，金鉱の発見より大きなニュースがあった。南北戦争の勃発である。これは民主党を支持し続けてきたフランシスにとっては，二重の意味で辛いニュースであった。オレゴンは開拓当初，民主党支持者が多く，最初の准州知事も民主党だった。しかし，合衆国の奴隷制をめぐる争いは，オレゴンへも影を投げかけてきた。当時のオレゴンには，ほとんど黒人はいなかったが，民主党を支持しつつも奴隷制を認めぬ者にとって，50年代中葉の状況は，いわば居心地の悪いものであった。さらに，合衆国からの距離を感じていた開拓民にとって，民主党のダグラスの唱える「住民自決」は好ましかったが，それが奴隷制導入を可能にする点は問題だった。オレゴンの住民は，とりあえず1857年，州憲法を制定し，州への昇格を自ら決定すると同時に，奴隷制を禁止し，黒人の移住を禁止してしまった。本来，国会での議決が先行すべきものであったが，ワシントンはあまりに遠く，そこでの手続きなど無視して良いと感じられたのであろう。[36]

しかし，こうした動きの中で，オレゴンの政治情勢は変化した。先にふれた如く，ニューサムは

注 (35) U. S. Census (MSS), Population, 1960, Roll 1055, Oregon City Precinct, Clackmas County, Oregon.

(36) 当時のオレゴンの政治情勢については次を見よ。Robert W. Johansen, *Frontier Politics and the Sectional Conflict: The Pacific Northwest on the Eve of the Civil War* (Seattle, 1955).

民主党批判派であるが，1858年2月，「オレゴンの共和党勢力は育ちつつある。オレゴンの民主党と，合衆国の奴隷制民主党とは対立している」と記す。そして，翌59年6月には「オレゴンの旧民主党は二派に分れ，互いに攻撃し合い，傷ついて，今や消滅した。……合衆国の偽りの民主党は崩れつつあり，やがて共和党が政府を担うだろう」と云い，60年の大統領選挙にあたっては，「ここではリンカンの見込みは良い。私は住民自決という点ではダグラスも良いとは思うが，……イリノイのオールド・エイブに投票する」と書いている。この年，オレゴンでの投票結果は，リンカン，5,344票，ブレッキンレッジ（奴隷制派民主党），5,074票，ダグラス，4,131票であった。(37)

フランシスは，リンカン大統領の当選については何もふれていないが，1861年6月15日，「合衆国では，血腥い仕事の準備をしているらしい」と記し，翌日，本稿の最初に引用したように，南北戦争による合衆国の分裂を悲しんでいる。オレゴンの住民は，合衆国からの距離を感じてはいたものの，やはりこうした事態になってしまうと，連邦の統一を望んだ。そして共和党，民主党合同の連邦党が形成され，北部への支持が示された。しかし，ニューサムは，62年の州議会選挙にあたり，「オレゴンの連邦党員が，民主，共和の二組の候補者を出すのではないかと恐れた。現在の状態からして，合衆国でもオレゴンでも，存在するのは連邦派か裏切者かという区別だけだ」と書いており，フランシスの立場からすると，複雑な心境とならざるを得なかった。(38)

「共和党は，権力を握って以来，次第に尊大になってきた。今や，リンカンが戦争をし，政府を治めるやり方に同意せぬかぎり，良き連邦の人間ではない。合衆国諸州の統一を尊び，憲法がその純粋な形で実施され，愛する国のすべての港で，帆柱に星条旗がはためくことを望んでおりながらも，分離派と呼ばれる人々がいるとは。私は，もし彼等を忠誠な市民に戻すことができるなら，古代の族長のように，ボロと灰を身にまとい，地に身をなげて泣くであろう。しかし，共和党員は否と云う！　分離派は鞭打たれ，罰せられ，征服されて連邦へ連れ戻されねばならないと。なんと奇妙な連邦だろう。おお！　共和党員はなんと堕落したのだ。」(61.8.17) もちろん，フランシスの共和党批判は，従来の民主党支持者としてのものであって，彼が南部を支持していたことを示すものではない。彼の正直な気持は，次の文章に現われている。

「われわれの連邦が破壊されるなどということが，あり得ようか。かつて地上に存在した中での最良の政府が。何故，南部諸州は自分達だけの利益にかまけて，われわれの連邦を破壊したりできるのか。おお！　彼らが間違いに気付き，大量の血が流される前に，最初に愛した者のもとへ戻らんことを。」(61.8.21) フランシスは，もしかすると，かつてジャクソン大統領が述べた「連邦は守られねばならない」という，有名な乾盃の辞を思い出していたのかもしれない。ジャクソン期のアメリカに育ち，民主主義とナショナリズムへの思いが強かったフランシスにとって，民主党の衰退や連邦の分裂は，辛く悲しい出来事であったに相違ない。

フランシスがヴァモント時代に愛読したジョージ・バンクロフトは『合衆国史』の著述を続け，

注 (37) Newsom, 58.2.2, p.73; 59.6.14, pp.101-3; 60.8.18, p.117. Robert Johansen, pp.128-53.
(38) Newsom, 62.1.23, p.128.

フランシスがオレゴンに移住した頃，独立戦争を扱った巻を書き上げていた。バンクロフトも，民主党と民主主義こそ進歩の担い手であることを信じ，1850年代後半に至っても連邦分裂の危機が来るとは考えていなかった。50年代半ばに西部へ旅行した彼は，西部の発展は，南北の対立を強めるよりは，南北の調和をもたらすと信じていた。彼は1860年の選挙の際にも，連邦の将来を危惧しつつも，望みを捨てていなかった[39]。西漸運動の大波の中で，ニューイングランドから中西部へ，そして太平洋岸へと移住を重ねたフランシスにしても，バンクロフトと同様，楽観的な物の見方をしていたに違いない。彼の日記は南北戦争の最中，1862年3月23日で終っているが，彼自身，その一小部分を担った西部の拡大が，連邦の分裂や一つの時代の終りを準備したとは，思っていなかったであろう。

（経済学部教授）

注 (39) Lilian Handlin, *George Bancroft: The Intellectual as Democrat* (New York, 1984), pp. 255-280.